公益社団法人千葉県隊友会　令和8年3月号（2026.3.29）

館山支部だより　Vol.133

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川 村　巌
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230

≪花大根≫
花弁が"大根に似ている"ことから名付けられたとか。 中国原産
＜拙宅の庭先から＞

桜の開花とともに間もなく新年度（令和8年度）が始まります。欧米諸国では9月を学校の新学期、10月を政府の会計年度の開始時期としている国が多いようですが、わが国では明治以降、会計年度や教育制度、社会全体が4月を業務等の開始時期として定着していると言ってもよいでしょう。

隊友会支部としては現在、会員の高齢化の進行とともに入会者の激減という難しい状況にありますが、新年度への切替えの時期に当り、前年度事業活動の見直しとともに状況に見合った隊友会活動を模索していく所存です。　《支部長　川村　巌》

支部の活動概要

≪2・3月の活動実績≫

3.14(土) 県隊友会理事役・後期支部長会議(千葉)
3.20(金) 館山市戦没者慰霊祭式（鶴ケ谷八幡宮）
3.29(日) 支部年度末役員会（コミセン）

≪4・5月の活動予定≫

4.18(土) 令和8年度県隊友会通常総会（千葉市内）
5.17(日) 令和8年度支部総会(館空会との合同行事)
5.27(月) 旧海軍落下傘部隊戦没者慰霊祭(安房神社)
時期未定　旧海軍館砲校戦没者慰霊祭 （館砲校跡）
5.30(土)　5月支部役員会（別法、コミセン）

令和８年度館山支部総会のご案内　　*5月17日(日)*

次のとおり恒例の館空会・隊友会館山支部合同の総会等行事を開催します。
今年は館空会の創立50周年でもあり、多くの会員の皆さんが一堂に会して相互に交流を確認し合い深める上で絶好の機会でもあります。一人でも多くの皆さんの参加をお待ちしております。 なお、合同懇親会には23日付で交代された第21航空群司令速水海将補はじめ各隊司令、隊員代表の参加が予定されております。

≪総会等行事スケジュール≫

期　日；2026年5月17日（日）
場　所；夕日海岸昇鶴 *（旧称 たてやま夕日海岸ホテル）*　TEL23-8111(代)
16：00～ 受付
16：30～17：00 隊友会館山支部総会
17：15～17：45 館空会総会
18：00～19：50 両会合同懇親会 *（開始前に参加者全員の記念撮影）*
懇親会会費；7、000円（女性4、000円）

出欠回答；館山支部事務局　　回答期限:4月24日（金）まで
メールアドレス g_navy@outlook.jp　または TEL 090-6497-6596
※館空会に所属する会員については、館空会から出される案内に基づいて出欠の返信をお願いします。　＜支部事務局＞

レクイエム

2/25　**安西富夫会員ご逝去（陸、享年89歳）**
隊友会館山支部会員として長年のご理解ご協力ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌
＜支部会員一同＞

資料等に見る平砂浦海岸　*"実像と虚像"*

「平砂浦砂防史（S33千葉県農地農林部刊行）」の中に、*開戦前年のS15年に平砂浦海岸が海軍用地になり、館山砲術学校（「館砲校」）の演習場として太平洋諸島の上陸作戦に備えた猛訓練の場と化した。このため農民たちが営々として築いてきた平砂浦海岸一帯の砂防林が片っ端から伐採され、白砂青松の景観が消え失せた*、と記述されている。

一見もっともらしいがこの怪しげな記述の真偽を検証するとともに、曖昧模糊の感がある館砲校の演習場について再度追究し実相を明らかにしたい。

平砂浦海岸に建設された館山航空隊の爆撃演習場

S5年に館山航空隊（「館空」）の開隊と同時に平砂浦海岸に館空の爆撃演習場が建設されている。残されている旧軍の演習場境界標設置図面（下図）および関連資料によれば、演習に支障のない範囲で演習場内での農民の耕作が認められ（有償）、砂防のための植林事業も継続されている。 S16年に開校した館砲校の演習場と共同使用だったのだろうか？

爆撃演習の状況を記録した資料は見当たらないが、戦争半ばのS18年に演習場規則の改正が行われている。 改正は「航空演習場」への改称と演習場使用統制権者が館空司令に指定されたことの二点である。開戦以降、国内各地に続々と航空隊が増設され、航空演習場の使用頻度の増大、競合が生じたであろうことと、館砲校の陸戦演習が入り込める余地は到底無かったであろうことは容易に推察が付くことである。

戦後、館砲校出身者たちの手で作られた「懐旧平砂浦」という回想録がある。"平砂浦"は彼らにとって苛酷を極めた館砲校の訓練、生活の場の象徴として脳裏に焼き付いているのであろう。回想録を通読しても"平砂浦海岸（いわゆるフラワーライン沿いの海岸）"を連想させる記述は見当たらない。

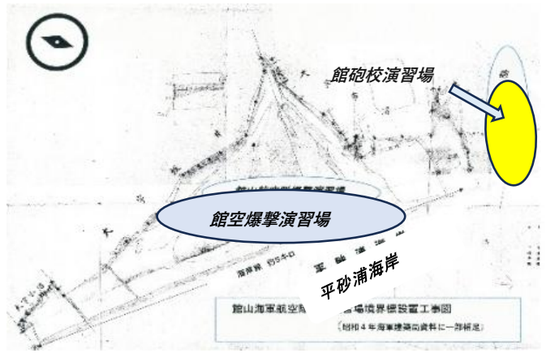
館砲校の演習場は（地理的に）どのへんにあったのだろうか？

掲載した写真①はS19年中ごろ真継不二雄海軍特別報道班員が館砲校を取材したときのもので、館砲校の訓練指揮所と言われる。前掲の「懐旧平砂浦」の中に、*館砲校の正門前を通る道路（国道410号線）の海側の小高い場所に"展望台のような建物"があり、中央から訪れる高官クラスが度々我々の訓練を視察することがあった*、という記事がある。この建物こそ眼下に海岸方向を一望できる場所に建てられた陸戦訓練指揮所であり、 道路から海岸に至るまでのエリア（佐野地区）が館砲校の演習場ということになる。　藤原と犬石に挟まれた海岸までおおよそ1．5km、幅1km弱の範囲で、当時は松林や灌木が点在し、その一角に館砲校のガス講堂と呼ばれたレンガ造の建物（化兵班の訓練用器材庫と推測。現在は撤去）が建てられていたことからも、この地域一帯が館砲校の演習場であったと断定してもよいであろう。

偶然出てきた"資料"に見る館砲校の陸戦訓練

以前、戦時中館砲校の予備学生を下宿させていたという家主の親族から、戦地に赴任する学生から預ったという柳行李を託されたことがある。私物の書籍や教範、教科書、大学ノートに交じって出てきた一枚のガリ版刷りの資料（B4判）に目を惹かれた。表題は書かれて無いが館砲校周辺地域の手書きの略図に地名とともに斥候、偵察、陣地攻撃、敵襲、野営等々の訓練想定と思われる注釈が施されたもので、陸戦訓練の参考として学生たちに配布されたものであろう。 行動範囲は館砲校を拠点として犬石、竜岡、豊房、滝口、富崎、相浜等々広域に及び、2～3昼夜にわたる訓練行程であったと考えられる。前述の演習場は、匍匐前進や塹壕構築、陣地攻撃等の基礎的な訓練の場であり、陸戦訓練の総仕上げとして公道、田畑、山林や人家、商店、神社が点在する広域的な校外を、実戦的な訓練の場として求めたのであろう。

戦地に赴任した多くの卒業生が戦場の露として散華され、戦後81年経った現在、当時の関係者のほとんどが鬼籍に入られ慰霊が儀式にとどまっている感を否めない。 彼らの粒粒辛苦の足跡、偉業を知ることに努めることが英霊



《図》館空爆撃演習場 境界標設置図
黄色付近一帯が館砲校の演習場

《写真①》館砲校の陸戦訓練指揮所》
海軍特別報道班員 真継不二男写真集より

《写真②》平砂浦海岸
黄矢印方向の陸地一帯が館砲校の演習場